

|              |  |
|--------------|--|
| Title        | カント批判哲学におけるカテゴリー論の研究   |
| Author(s)    | 森, 芳周  |
| Citation     | 大阪大学, 2006, 博士論文   |
| Version Type |  |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/46574">https://hdl.handle.net/11094/46574</a>  |
| rights       |  |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。 |

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

|            |  |
|------------|--|
| 氏名         | 森 芳 周  |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学)   |
| 学位記番号      | 第 19937 号                                      |
| 学位授与年月日    | 平成18年3月24日                                     |
| 学位授与の要件    | 学位規則第4条第1項該当<br>文学研究科文化形態論専攻                   |
| 学位論文名      | カント批判哲学におけるカテゴリー論の研究                           |
| 論文審査委員     | (主査)<br>教授 中岡 成文<br>(副査)<br>教授 鷺田 清一 助教授 舟場 保之 |

#### 論文内容の要旨

本論文は、ドイツの哲学者イマヌエル・カントの三批判書といわれる中でも最も基礎的であると考えられる『純粋理性批判』において提出されたカテゴリー表についての考察である。カテゴリーとは、『純粋理性批判』において、感性的直観に適用されるところの純粋悟性概念であり、この両者によって認識が可能になると一般的には説明される。しかし、本論文は認識の機能としてのカテゴリーの働きについての研究ではなく、むしろカテゴリーの「体系」に目を向けるものである。そしてその考察を踏まえて、カントが『実践理性批判』や『判断力批判』においてどのようにカテゴリー表を適用しているか、そしてその意義とは何かということを明らかにしようとしている。

第1章ではカントが『純粋理性批判』を著す前の時期(いわゆる前批判期)の著作『可感界と可想界の形式と原理』の中にすでにカテゴリー表の着想が含まれているということを論じている。それは知性概念とよばれるものであり、そこには『純粋理性批判』においてカテゴリーとされる可能性、現実性、実体、原因が含まれている。またこの知性概念は、感性的概念を閉め出すという論駁的、否定的な役割を担わされており、そのことが学問を誤謬から守るということを明らかにした。

第2章では、『純粋理性批判』のカテゴリーの体系における判断表の検討を行っている。カントのこの判断表は、彼以前の論理学とも現代のものとも異なり、彼独自のものであって、たびたび批判的になっているが、この判断表を1つの出発点としてカントは『実践理性批判』における自由のカテゴリーを構想していることを論じた。

第3章では、『純粋理性批判』の体系におけるカテゴリー表の位置づけを確認しており、それが自然科学や形而上学の基礎づけともなりうることを明らかにした。

第4章では、引き続き『純粋理性批判』におけるカテゴリー表の問題を論じているが、殊に無の問題について検討している。カントにとって、無は何ものでもないものではなく、思考物、欠如的無、空想物、否定的無というようにそれぞれに意味づけがなされ、認識の限界をかたち作っており、いわばわれわれの認識に対する戒めのような役割を果たしているということを明らかにした。

第5章では、『実践理性批判』における自由のカテゴリーの問題を論じている。そして純粋理性の実践的拡張の議論と『純粋理性批判』の宇宙論的理念を併せて考えることによって、自由のカテゴリーが道徳法則ではなく、むしろ格率に関わることを明らかにした。

第6章では、『判断力批判』におけるカテゴリーの問題を論じている。『判断力批判』では、明確にカテゴリーの

表は描かれていないが、趣味判断の説明に、質、量、関係、様相というカテゴリーの区分が用いられており、美に関してもカテゴリーによる区分が可能であるということを明らかにした。

### 論文審査の結果の要旨

申請者はこれまで一貫してカント哲学、しかもそのカテゴリー論をテーマに研究してきた。本論文はこれまでの成果をとりまとめたもので、カントのカテゴリーの体系を、彼の三批判書に通底する発想としてとりあげ、その観点から、カントの批判哲学を統一的に理解しようとする試みである。カントの批判哲学は、それまでは混同されてきた諸々の限界を画定する哲学ということもでき、認識論、道徳哲学、美学はそれぞれ区別された問題領域を扱うはずであり、その区別を曖昧にすることは、批判哲学の意義を見失いかねない危険もある。しかし申請者は、カテゴリーの問題を認識の機能の問題としてではなく、むしろカント批判哲学の体系の問題として取り上げて議論し、その点を究明するために『実践理性批判』、『判断力批判』までも視野に入れて考察しているのであり、カント研究に少なからぬ貢献をした論文といえる。

他方、本論文では申請者のこれまでの研究をさらに拡張して、前批判期の著作のうちにカテゴリー表の着想を見いだそうとしているものの、前批判期の取り扱いが量的に手薄であり、またその着想を見いだしたことで批判期のカント哲学の解釈にどのような新しい側面が付け加わったかを十分に説明できていない。またカテゴリー表の着想を『実践理性批判』、『判断力批判』へと拡張することの正当性や意義についても論を尽くしているとは見えず、これを展開した新カント派の哲学などを含めて、カントのカテゴリー表の意義と射程をさらに考察する課題は今後に残されていると思われる。

以上のように、今後のさらなる討究を待つべき点が少なくないとはいえ、一つ一つがどれもきわめて難解な三批判書を綿密に読み解き、二次文献も渉猟しながら、カテゴリー論という点からこの三批判書に新たな光を当てたことは、今後のカント研究に資するところが小さくないと思われる。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。